

^ 5
5676



門
號 5676
卷



辭世

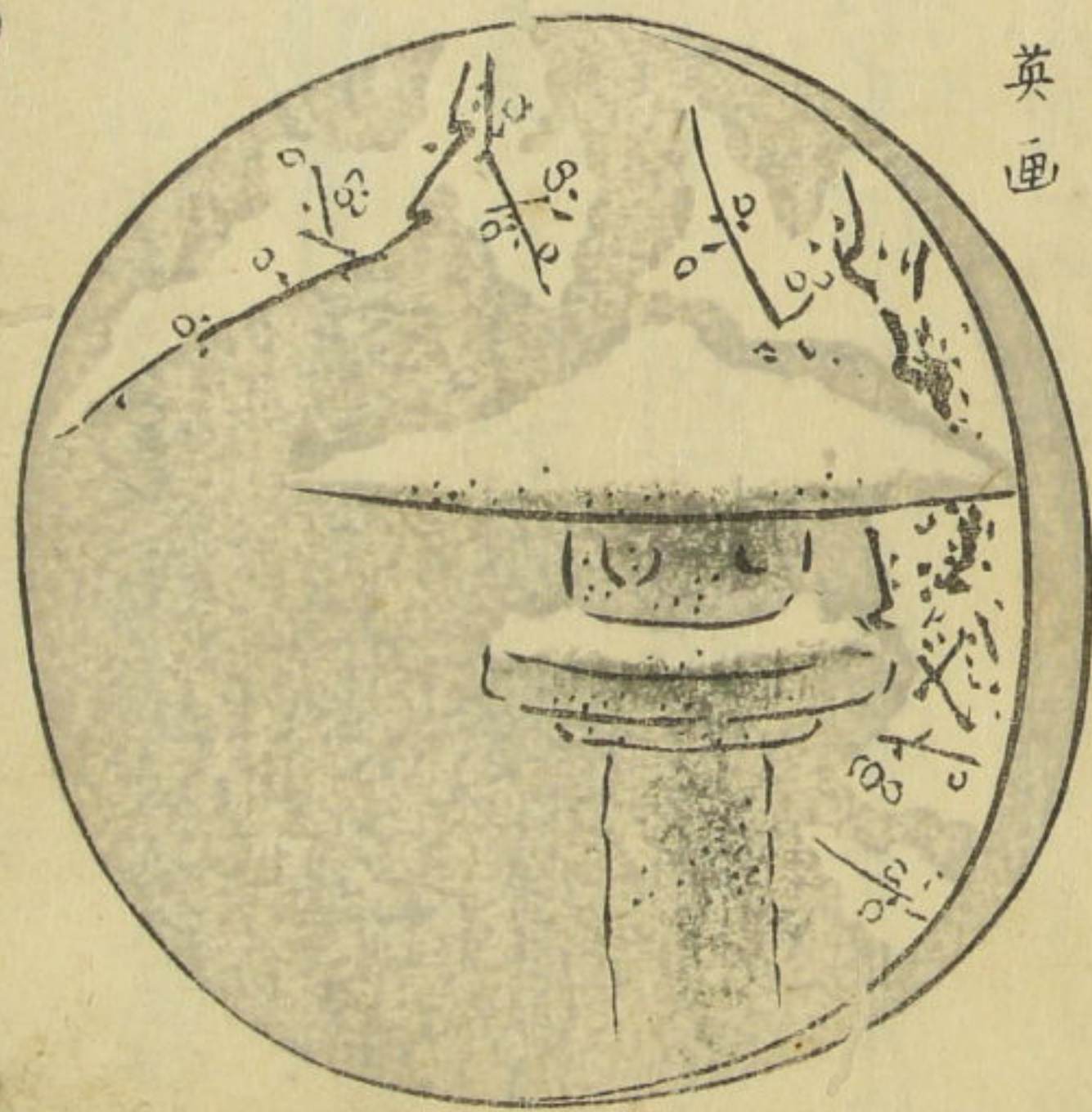
積子

雪佛と我

年子けり

海月菴露白

春英画



泉之露白の武則章手内圓府洞乃産ふ〜氏と
新井とよひ代々農作と業と世々其悔力よ文雅也
如く江戸祇徳林七世一陽井老主格門下入る
思世之邪の大造遊了る年たり初天命と知ふ
頃らり世り道とを辞〜〜海月菴と号し
近傳初学の道〜と名に他志なき〜十有餘
年多か〜此里〜泉不月の長也〜多〜

侍〜のまぬ寛政参拜郷ふ杖は〜且健中ふ
慈原の屋中住あり〜又〜のよれ〜
おれ〜法子殿様〜
〜の植持〜
空の〜
見え〜
は〜有孫の〜

妻申のぬむいこころはさきこゆれと

伊は直まのこころはさきこゆれと

子向しやむいこころはさきこゆれと

足すその事思ひ出さしはさきこゆれと

追狹 懐齋 各前書略

名は依りてのこころはさきこゆれと

水はせぬ公たうらむや子向あり

男

露朝

妻

志智

其子

露圓

内國府同連

寸玉

鏡湖

五

葉はあや中よりの友のま向くこと

雪は清くしこころはさきこゆれと

春はあやむいこころはさきこゆれと

立はあやむいこころはさきこゆれと

平はあやむいこころはさきこゆれと

光はあやむいこころはさきこゆれと

秋のまはしこころはさきこゆれと

其玉

春儀

省壽

立志

壽山

大輪

也好

高岩連

白くはるるも御も塚り雪
雪、あせは定のまき師を式
以金の友やまきくは切や年
舟まらほしとわの役よ木枯り
雪何道悟るそ今ハ夢の世や
あゆみや能目くゆく手向の所
思ひ来るかひり一巻一巻の舟

荷 蔭
文 蕙
露 井
魯 山
松 里
耕 哺
松 調

穠ハやまの母への母の乃まろへ
今分るのそ空実の果の師志式
清く後淋しふまほそ評ね
こつてこつて思ふ山巨燧の何さあり
句地名の朽地名の題もろかりらる
こめくまれをそや思ひの積るを
舟の銘ハ残る少桶や目の配

定 綱
蛾 光
青 蛭
起 石
文 斯
凉 石
一 二

二也りの夜宿受のおまの寄り
 寄りと出くはまの日向の水仙花
 ふりて積る日数や塚乃寄
 手取の心算を身かして心算の元
 意を知らぬ数を枝の松
 の結ぶしちみ大幹よなみく
 侍りてまゝにせのちの目と

雲 秀
 斗 尺
 鳳 尾
 雨 好
 雨 石
 起 月
 鼠 弓

茶師寺
石橋連
壬生連

手向合せめをいさけきうり
 俯伏して治程を一巻の糸
 可 笑
 芋 滴

軸 冬 糸 書 果

真之とせしや月夜をわら
 道一おまの糸より寄乃ふる塚も
 年忌とふ糸の佛の縁拂ひ
 積る事ことせしや廿二日世界

寶 馬
 津 富
 花 縣
 九 井

たもて魂も更敷よ入ま佛名

左 簾

手ひよこ羽とぬきや道の人の依

得 罟

坐臥白ぬき平ら門よ入てよりこ巻とせあま
舟船のさそ難情に捨けよて其道をよてこ回
道後を依ては手露水大法の書めよぬき

發句唱よみのこととせよいの茶

素 外

八

はもて

寄佛とや

あよける

